

## 史料紹介

## 甲良家文書の能舞台・橋掛

三木 靖<sup>1)</sup>

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

島津氏は中世以来、能に関心が深く、藩政期もその延長線上にあった。

その鹿児島の能については、藩政期以前から『鹿児島県史料 旧記雑録』、『上井覚兼日記』等にも史料が見られ、1944年には森末義彰「薩南の芸能—上井覚兼日記を中心に—」が『国語と国文学』に掲載され、日本芸能史のなかでも早くから島津氏のもとで、能が藩主、家臣団に受け入れられていたことは注目されていた。当然鹿児島の能についても、研究の蓄積がある。

当の島津氏は、早くから能関連史料も蒐集してきた。1857年、島津斉彬が築いた工場群を「集成館」と称したが、薩英戦争の攻撃でその大半の施設を失った。ところが島津忠義は直ちに再建を目指し、1865年蒸気鉄工機械所をはじめ諸工場を整備。ところが廃藩置県政策のなかでこの工場は官有となったり、民間に払い下げられたりし、その後1889年に島津氏の所有に戻り、集成館の名称に戻った。だがしかし、事業は不振で1915年集成館は閉鎖された。4年後1919年島津忠重は、存続していた蒸気鉄工機械所を改修し「尚古集成館」として開館、島津氏の歴史関連史料の蒐集と展示施設となることとなった（『尚古集成館の歩み』）。

1981年頃以降『能楽タイムズ』等で能について発言していた林和利氏は1987年から、『上井覚兼日記』能・狂言関係記事一覧（『芸能文化史』第8号、1987.11）や、「薩摩藩主・島津重豪の生涯における能楽の享受」（『鹿児島女子大学研究紀要第8巻第1号』1987.3）等鹿児島の能についてジェネラルサーベイの研究成果の発表を開始。更に『薩藩旧記雑録』能・狂言関係記事一覧等島津氏関係の史料を年次順に整理され、特に戦国大名島津義久とその弟義弘、初代藩主家久、8代重豪、（12代藩主忠義の後見を執った、11代藩主の弟）久光ら藩主と藩主に準じた人物の能楽活動を明らかにし、藩の能役者中西家や、鹿児島諏訪大明神の能芸関係をも明らかにし、鹿児島の能の研究に大き

な刺激を与えた。研究史から言うと、同氏以外の成果にも言及すべきだが、同氏は2003年『能、狂言の生成と展開に関する研究』（世界思想社）として研究の全体をまとめ、専門研究者となっているので当該分野の先駆的研究成果の事例とさせていただく。

当の鹿児島で言うと、尚古集成館に勤務されている田村省三氏が1996年『尚古集成館紀要』8号に「—資料紹介—『中西氏系譜草稿』—薩摩藩世襲能役者中西家の系譜—」を発表されたことが、鹿児島の能研究分野で特記すべき成果の先駆けとなった。この間、尚古集成館は能関連史料の蒐集に当たっておりこの発表はその成果の一つであった。これは鹿児島における能の歴史の豊かさが、島津氏との関連で理解できることを示している。その後も同氏は2013年『尚古集成館紀要』12号に「—資料紹介—「能狂言正圖」」、2014年『尚古集成館紀要』13号に「—資料紹介—「能楽図絵馬」」等を発表され、能の研究史を広げている。

さて鹿児島の能関連については、藩政期以前から『鹿児島県史料 旧記雑録後編』等や『上井覚兼日記』に史料が豊富である。よく知られた内容であるが一事例に触れさせていたきたい（『日向根白坂の戦い—その背景をめぐって—』（北部九州中近世城郭研究会2014年9月28日『平成26年度九州城郭研究大会 資料集』）で紹介した）、1586年秀吉勢をバックにした大友勢の領国攻めを目指した鹿児島勢の主力は7月に鹿児島を出て、8月中旬には立花城包囲等をしていていたが、23日包囲を解き、かわって地元勢の秋月種実ら包囲を任せ、翌日には島津勢の指揮を執っていた島津忠長、伊集院忠棟が鹿児島本領である薩摩大隅等の大軍勢を筑前、筑後から肥後に引いた。その主勢力は9月20日には本領の地に帰陣することになった。この際、島津義久、義弘、歳久、家久ら多数の島津中枢部の指揮者は肥後八代で、この筑前、筑後で働いた軍勢の見参を受け、18歳の若者渋谷与吉の祝い能を堪能した。この渋谷与吉は、1585年、京都から九州に来た、手猿楽者渋谷

谷与吉郎一座(林和利『能、狂言の生成と展開に関する研究』199頁)のリーダーである。なおこれは旧記雑録後編「長谷場越前自記」に見える記事である。九州北部で戦った軍勢を歓待したのは「祝い能」だったのである。それも当然、激しい合戦が行われた義弘、家久の陣中ではしばしば御蹴鞠とともに「種々御乱舞」と能や仕舞が演じられていたのであった(『薩藩旧記雑録』、『高麗入日記』)。戦国期の能は、藩政期の能の前史で、その時期には能は陣中で演じられることが珍しくはなかったのである。

この歩みを踏まえて、2015、6年度に鹿児島城本丸から能舞台橋掛跡遺構が発掘されたことを確認しておきたい。埋蔵文化財センターの現地説明会資料では「長さ9.5m、幅1.4m、高さ0.3m」だが、高さは、上部が攪乱されていたため、残念ながら、原形は分らない。とはいえ、床面は溝状で、硬化面には、消石灰を主成分とした漆喰が敷き固めてあった。このような技法は、音響効果を高め、特定音源の残響コントロールを目指したもので、既に橋掛の場合でも以前から使われていた。そればかりか、漆喰塗りの硬化面には壺等を埋め込む取り組みも各地で進んでいた。

藩政期に将軍家が能を重視したので、江戸城以下の各地の有力な城では本丸、二之丸に複数の能舞台を設置したものが少なくない。当然江戸府内の大名の諸屋敷にも常置されており、鹿児島藩でも中屋敷である芝新馬場屋敷には本格的な能舞台があり、現在(セレスティンホテルの庭園の芝さつまの道に)屋敷図面付きでその跡が表示されている。

この将軍家の江戸城の本丸の能舞台は、正門には東から登るが、枳形経由で、北側の御玄関に通じている。それを、右手に行けば番所、左手は堤重門を越え、正門の西に当る「表」に出る。その南から西に、御楽屋、鏡ノ間、橋掛、御能舞台が展開していて、能楽舞台は正門に隣接し、本丸でも最も政治秩序の高い場所にあった。

ところで、成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」によれば、鹿児島城でも正門(御楼門)経由、2回曲がる枳形で、北側の「御一門方入口」(御玄関に相当)に通じている。その左手は堀重御門を越え庭にでる。その先、熊之間越に能舞台がある。この図の「熊之間」を活かせば、その南には「鏡ノ間」があり、橋掛は能舞台の東端に続くものである(この項については、図の精査が必要である)。そういう問題点はあるが、能舞台が正門に隣接し、本丸でも最も政治秩序の高い場所にあることでは、江戸城と鹿児島城は同一の様態である。

その江戸城では『徳川礼典録』によれば幕府の御謡始め

と御酒(盃)頂戴は以下の通りであった。正月2日は御謡始めで、能舞台の庭を挟んだ大広間で月番、若年寄、年長の家老が年男を勤め5ツ時(午前8時)には鬘斗目麻袴で登城する。3日は無位無官の大名、寄合、500石以上の無役の武士、諸御用達町人らが5ツ時に登城し、大広間中段の間で、将軍の立礼を受ける。夕刻7ツ半(午後5時)から、謡の宗家観世、金春、金剛、宝生、喜多による御謡始め。将軍は酉の刻(午後6時)に大広間中段に出御し、御三家方に対面し、下段の間に着座。将軍より御三家への御酒3献目のとき老中の声で観世大夫が四海波の小謡を謡い、御銚子に酒が満ちると囃子方が老松を奏し、続いて高砂が終わると観世大夫が御下段の間近くに進み、御奏者番が将軍から賜った鬘斗目2枚と紅裏白綸子の時服を下賜する。大夫は御祝いの言葉を言上、観世、宝生、喜多の3人舞となる。その後将軍から御家門諸大名に肩衣を脱いで、能役者に与えるよう御声がかかり終了する。

また幕府は、将軍御代替わりの祝賀を能舞台と大広間で行った。「町入能拝見之図」によれば、その代表的行事が町入能で、将軍宣下、官位昇進、御代替わりなどの儀式が済んでから行われる御祝儀の能で、将軍は白書院中段の間に出御し、下段の間から二の間、次の間に諸大名、諸役人、白書院大広間前と、能舞台の間の庭には江戸の町人のうち、1町から2人ずつ(町名主などの町役人)が陪観する。全員鬘斗目麻袴を着用。町人は大手門から入り、中の門で役人からそれぞれに唐傘を下賜された。町入能は、入れ替え制で毎回2千人、1日に5千人に及んだこともあり、規模壮大で、豪華な行事であった。拝観を望む声が町々に満ちていたという。陪席する大名には島津氏も含まれており、島津氏は町入能の実態を知っていたが、島津家が町入能に取り組んだ報告はまだない。大名によっては通り抜け等の行事に取り組んでおり、領民への本城公開は領民との交流事業と考えられていた。

鹿児島では能が盛んで、本丸の能舞台以外にも、城下に能舞台が存在していた。そこで、諏訪大明神の祭礼に伴う、神事能が藩の能奉行、神事奉行の管理下に毎年厳格な礼式に基づいて行われていた。その能舞台が、諏訪大明神の南約400mにあった頭屋(林和利『能、狂言の生成と展開に関する研究』306頁)等で、城下絵図等には、他に能舞台のある屋敷がある(同前294頁)。なおこれらの施設も含めて、観能等を主にしつつ(形式は多彩で)、広い意味で藩の領民対応策が行われた可能性を考えておきたい。城下の中西、柏木、小幡の名称の付いた能舞台は、1887年ま

では各流派の活動の場だったが、久光没後は衰退し、1908年には住民に有料で貸与するようになった（唐鎌祐祥『昔の鹿児島一かごしま新聞こぼれ話』2008年）。

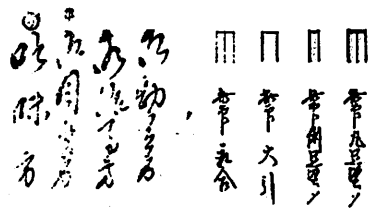
ところで、前記の様に鹿児島城本丸で発掘された橋掛遺構を検討するのに、鹿児島の風土の影響や、周辺の城の事例の機械的な模倣はあり得ないことは言うまでもない。將軍家の本拠、江戸城本丸の能舞台についても考慮したい一方、將軍家の本拠、江戸城本丸の能舞台については、幕藩制の構造等を考慮すれば、上方をも含め、一切関連なしとは断言できない。その江戸城の能舞台については、大棟梁「甲良家文書」で詳細が分かる。因みに、同文書の578点は「東京都立中央図書館所蔵 江戸城関係史料一覧」があり、造営年度、御殿、図面種類、名称、縮尺、寸法、備考、図書館整理番号が記載されている（〈発行；小学館〉『日本名城集成 江戸城』1986年）以下には、東京都立中央図書館所蔵の本丸能舞台の幕末期2度の再建時の詳細指図等を9点みていただき、その盛事の様態に触れていただきたい。

江戸城は火災等で幕末には主なものだけでも、天保年間（1830～1844）、弘化年間（1844～1848）、万延年間（1860～61）、元治年間（1864～65）と建て替えがあり、江戸城本丸は天保、万延の被災後全面的に再建されている。その本丸には表能舞台（表舞台と書かれることが多かった）と奥舞台があり、万延年間には橋掛を持つ御新座敷の設計図もあった。更に本丸以外にも能舞台が設計建築されてもいた。江戸城には能舞台が常時、複数建設され、運営されていたのである。

今回の甲良家文書9点には、表舞台関連のものが6点ある。以下東京都立中央図書館の図書館整理番号Naで示し江戸城本丸の能舞台について理解の参考に供したい。Na 6169-14（図3）は、「御本丸表御舞台瓶地絵図」で図面には天保15年とあるが、一覧等は弘化元年と処理してある。言うまでも無く、西暦1844年である。天保年間の建設時の図面で、橋掛の地下に4壺、後座の地下に2壺、御舞台の地下に7壺、の合わせて13壺の瓶が、地面相当面

に口を出すように埋められていた。姿勢は傾斜したものがあり、瓶傾絵図は、この図面内に（分り易いようにと）拡大図も入れておいた。瓶の口径は3尺5寸＝約106.03cmとある。関連するので、Na 6169-18（図6）をみてゆきたい。表題は「御本丸表御舞台 御拭板下 瓶居付方 絵図」で右下に万延元庚申年御普請絵図の印鑑が押されている（この部分は以降、省略する）西暦は1860年になる。Na 6169-14から16年後であるが、今回の表舞台の再建時には新規に作り直した様で、瓶は形が異なっている。とは言え、橋掛の地下に4壺、後座の地下に2壺、御舞台の地下に7壺、の合わせて13壺の瓶が、地面相当面に口を出すように埋められているという点は前回を踏襲している。大きな構造は、伝統になっていたとみていい。だが、瓶は個性的で口径は3尺＝約90.3cmとある。口は「3寸4分」勾配で、平図面には、一つ置きに、外の輪が逆向きに見える記載になっている。壺のサイズ小さくなっているなど、前回対比だけでも気になる所がある。

6169-15（図4）は天保15＝1844年の表舞台の建地別絵図で、表御舞台・橋掛の妻を主にした立面図、6169-16（図5）は「御本丸表御舞台御屋根水取絵図」で表御舞台、橋掛、脇座、後座等の雨水用の8壺の配置平面図、6169-19（図7）は万延元年＝1860年の「本丸、西丸共通の御舞台御屋右側壁」の竹の繁茂を描いた図である。同期に本丸と西丸に表舞台が存在し、壁絵は共有と示されている。6169-27（図8）は「御本丸表御舞台続キ御橋掛、鏡之間取合建地割」の図で主に橋掛が扱われた立面図で、万延元年＝1860年作成。6169-29（図9）は「御本丸鏡之間、御楽屋、御書院番、富士見番所地絵図」で表御舞台の周囲等の配置平面図。6169-07（図1）は「御本丸御新座敷其外共足固メ絵図」で御新座敷は御橋掛を持っていた。幕末期には御新座敷が表御舞台と共通した役割を持っていたことを想定させる。但し同時に本丸内に3ヶ所の舞台＝能舞台が機能したであろうか。激動期の江戸城本丸の能舞台には検討すべき課題が少なくない。



24

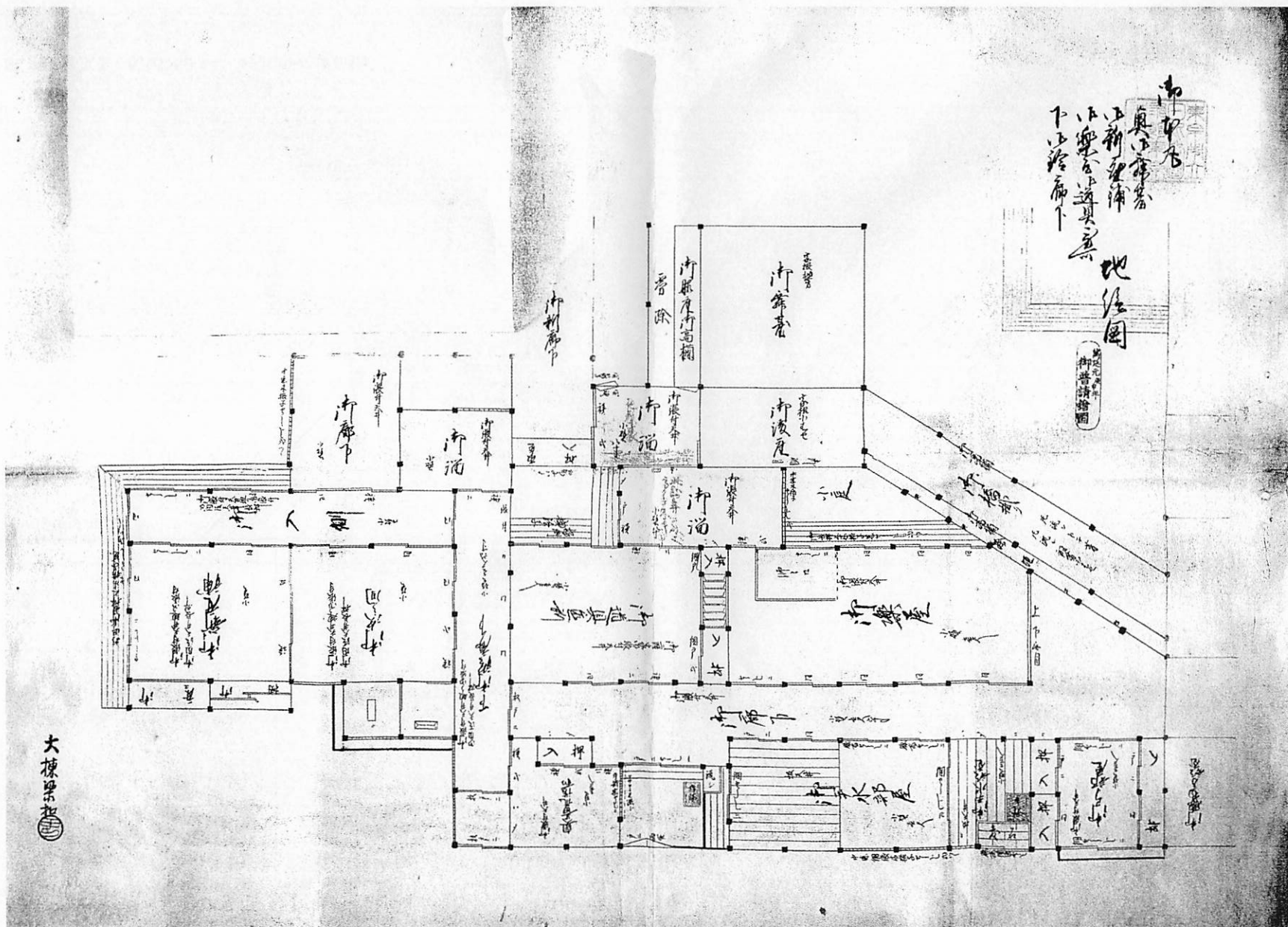
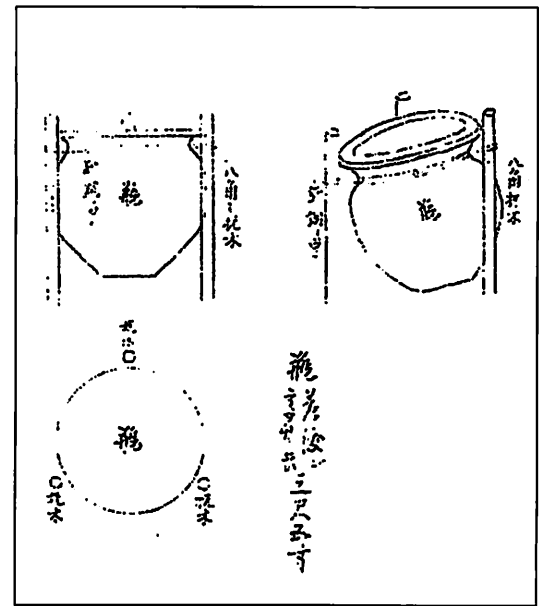
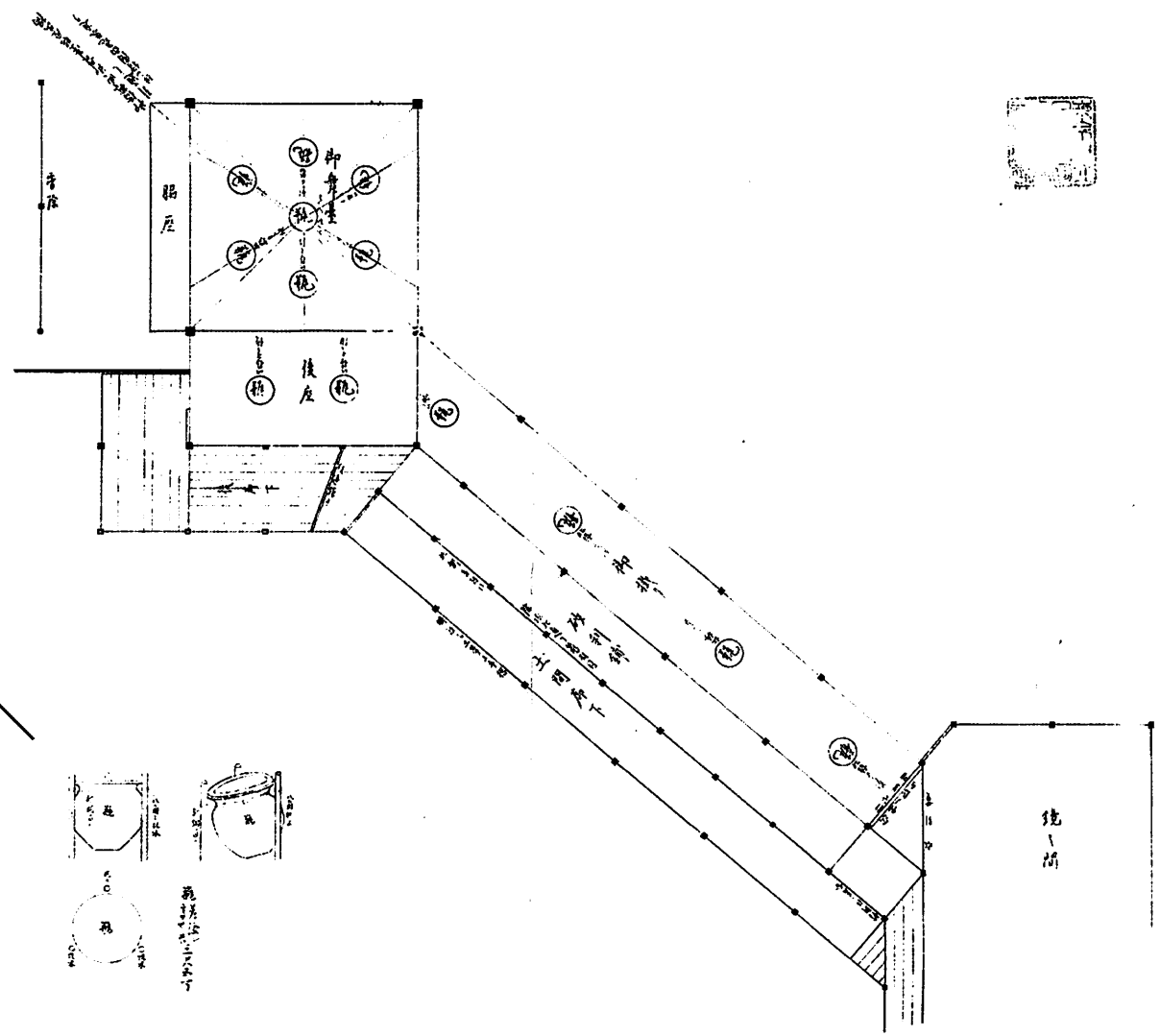
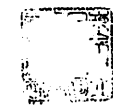
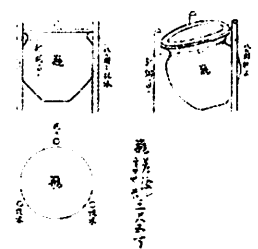


図2 甲良家文書 No.6169-11 東京都立中央図書館蔵

佛堂  
表佛舞臺鏡地圖  
五十八



(壺の記述の拡大)



五十八

図3 甲良家文書 No.6169-14 東京都立中央図書館所蔵



市本丸  
表御舞臺  
山屋根水取繪圖

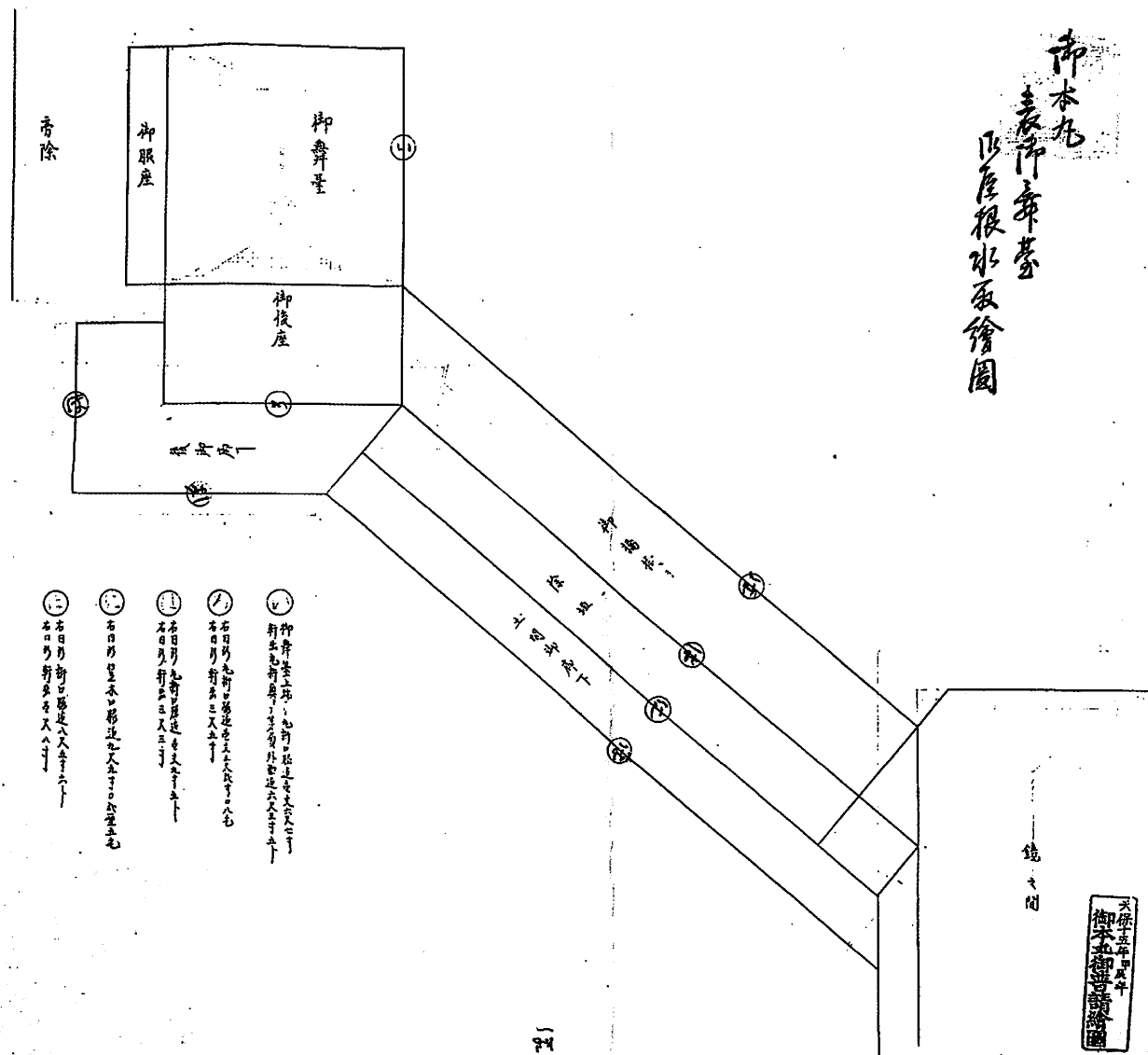


図5 甲良家文書 No.6169-16 東京都立中央図書館所蔵



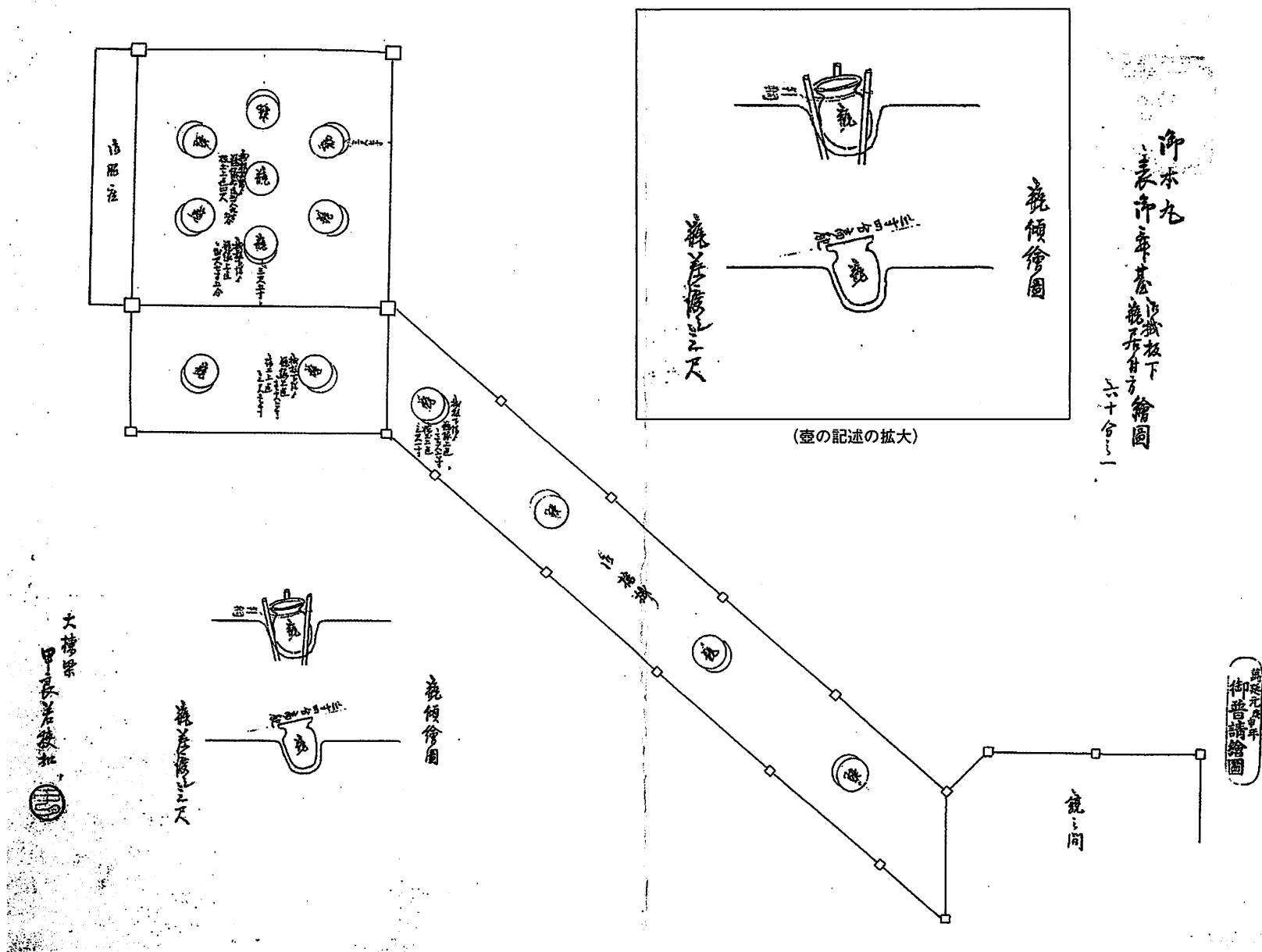


図6 甲良家文書 No.6169-18 東京都立中央図書館所蔵



図7 甲良家文書 No.6169-19 東京都立中央図書館所蔵

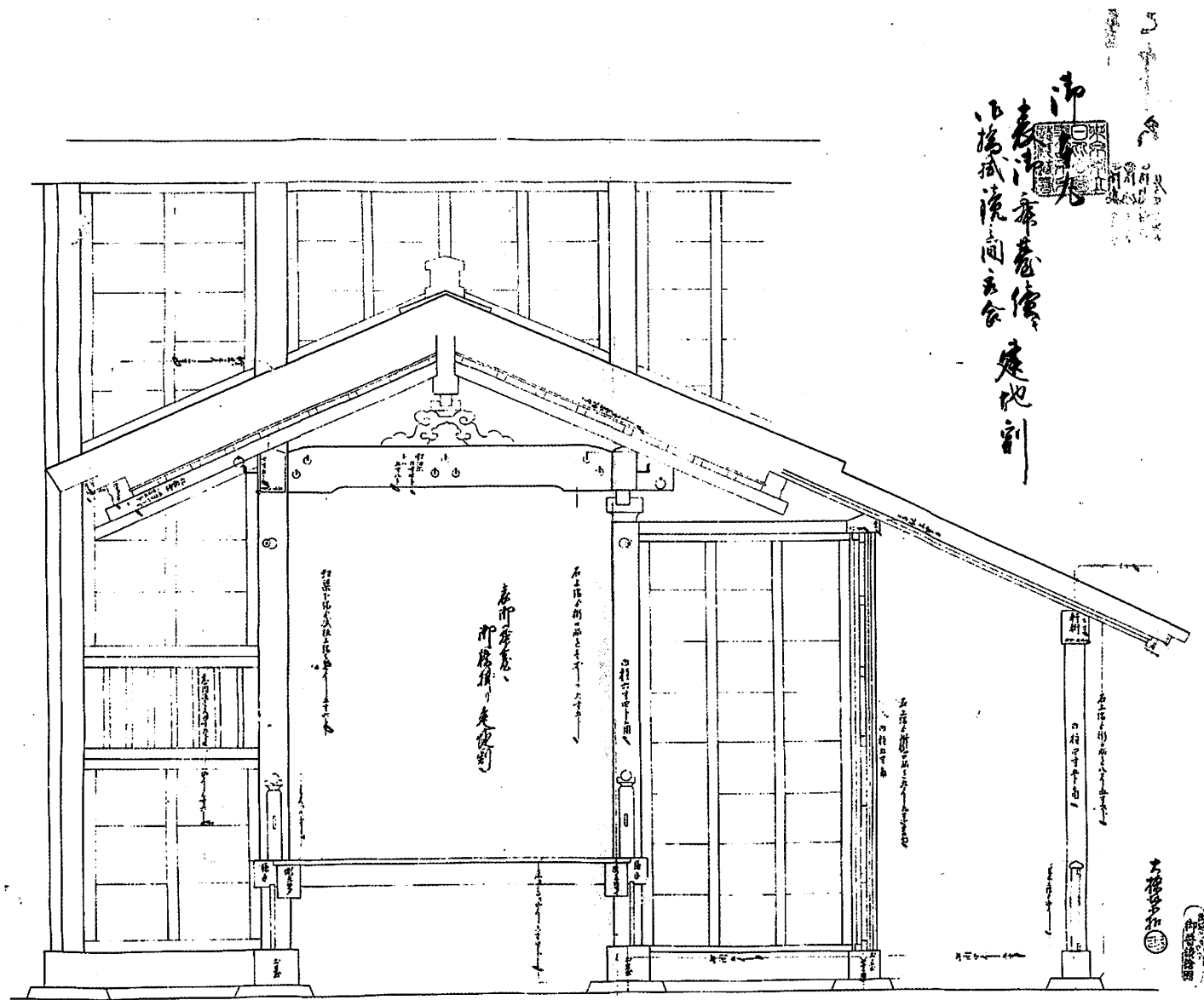


図8 甲良家文書 No.6169-27 東京都立中央図書館所蔵

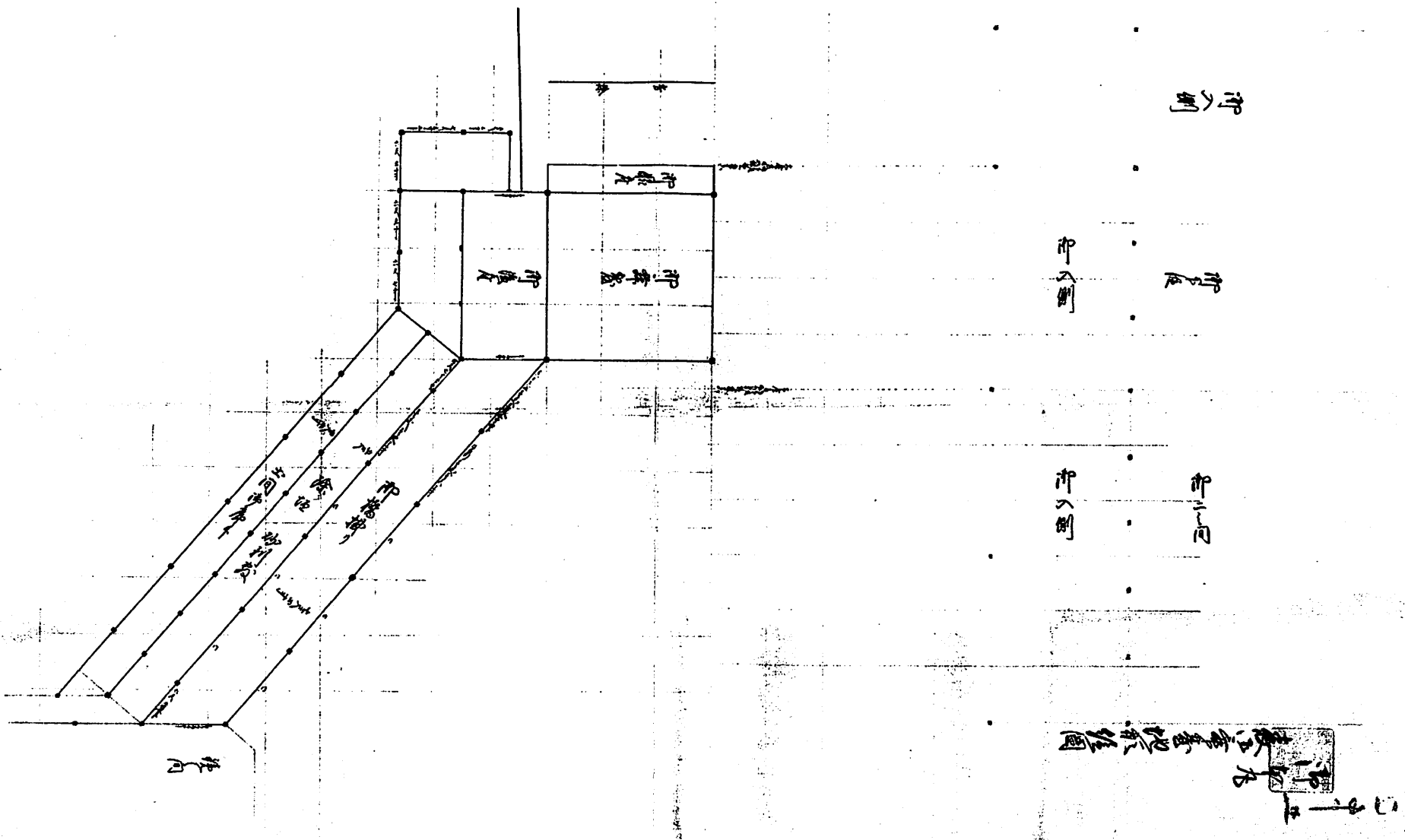


図9 甲良家文書 No.6169-29 東京都立中央図書館蔵